三河アララギ

２０２４年 令和６年１１月 霜月（しもつき）

十　一　月　号

第 七十一 巻　　第 十一 号

ニューヨーク日記（217）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

PLAYING WITH DOLPHINS

Blue Shoe Diaries

素敵すぎる出会い！ この写真、私が撮ったの！ マイアミに住んで良かったと思える瞬間。イルカさん見られたらいいなと思って、夕方ボートに乗りに行きました。特に何も起きなくても充分素敵なサンセットクルーズなんだけれど、今回はイルカの群れ（それもピンクなイルカもいて）に出会って遊んでくれました。なんかボートからのぶくぶくな波に乗るのが楽しいらしい、クルクル回ったりピョンピョン飛んでくれて、まるでイルカのショー。リールの方に様子が分かる動画載せてます。凄いから見てみてください。

The experience was pure magic! We set out on a boat ride at sunset, hoping to catch sight of dolphins in the distance. Just glimpsing them felt like a lucky moment, but I never expected the excitement that followed—a whole pod of dolphins swam right up to our boat, including a pink dolphin! They played in the waves, leaping and twirling gracefully as if putting on a show just for us. This photo captures one of those incredible moments, but it doesn't do justice to the thrill of seeing it live. Truly the best boat ride ever! Check out my reel for more of this unforgettable encounter.

目次

第七十一巻第十一号（通巻八五一号）

表紙・数珠玉（1）
ニューヨーク日記(217)　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「草々」　今泉　米子（5）
はゝきくさⅢ　大須賀寿恵（6）
三河アララギ歌集Ⅴ　夏目　勝弘（7）
『歌集　八千代』　岡本八千代（8）
三河アララギ歌集Ⅵ　弓谷　久子（10）
儚む　今泉　由利（12）
「情熱」　安藤　和代（14）
仄かなかほり　山口千惠子（16）
十年　杉浦恵美子（18）
花ごころ　伊藤　忠男（20）
庭中改修（その八）　白井　信昭（22）
秋めきて　矢崎　直人（24）
『ことよせ』　いーはとぶ　森　厚子（26）
水野　絹子（26）

現代学生百人一首　東洋大学
牧原　規恵（27）
稲吉　友江（27）
鈴木美耶子（28）
牧原　正枝（28）
大武　智子（29）
小野　陽平（30）
但馬　凜（30）
浅海　綾音（30）
鶴岡　彩音（30）
星　夏穂（31）
髙倉　綾乃（31）
水落　眞琴（31）
三谷　力輝（31）
植村　公女（32）
木村　歩歩（32）
今泉　如雲（32）
矢崎　直人（33）

今泉　由利（33）
川口カルチャー受講者自作自詠俳句集（34）
折々の詩（九）　ふじのけんじ（36）
五感を澄ませば(29)　杉浦恵美子（38）
附録（二十九）　矢崎　直人（40）
『寒露から立冬へ』　中屋　保之（42）
『酔いの徒然』（151）　丸山酔宵子（44）
「輪廻転生」　高橋　育郎（46）
絹の話（168）　今泉　雅勝（48）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（50）
初狩便り36　花野みぷり（52）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（54）
康鍼治療院　玄　翁（56）
陽八月作有り　殿山　木風（58）
編集室だより　今泉　由利（60）
「三河アララギ」について（62）

『俳句』

歌集　わが冬葵

御津磯夫

芭蕉花あり落ちつぐ苞の黄の上にある日は時雨の雨を湛へて

無患子（むくろじ）の實成らぬははやく黄葉（もみぢ）して裏の木立の奥に細れり

曇りふかく暮れゆくころを柊の木下の黄葉あざやかに見ゆ

ふるきもの限りもあらずいで來り捨つる時代を拾つるに難し

曾祖父の手澤の唐詩集注より積りし百年の埃まひたつ

患者らの大かたは無料の老人となりたることはわれも樂しも

庭のうちの呆けし土筆をつみ集む老病ながく臥す母のため

赤松の枯枝ひとつ切らざるはわが老いの腕を折らぬ要心

七十のよはひはすぎむ七十の繰り返すなきけふの一日も

山茶花は白く音なく笑きて散る木蔭の石の苔の上にも

歌集「草々」

今泉米子

雌松立つ雲井の山の埴土にちりばふは天平の瓦のかけら

宮阯をくだりゆきつつ山砂利にまじれるものの布目をぞ言ふ

野ざらしに積上げし火鉢の間ゆき灰釉かかる信樂の壺

タマの木はタブの木または犬楠とききて忘れぬ窓鏁すときに

今晩のカロリーは少し足らねども鰺の乾物はあした食ふといふ

感謝狀屆けられたるタベにて秋の淺蜊の味うすき汁

いつよりかインコアナナスの一鉢ありカーテンを閉ざすその薬に觸れて

子の名札掛かれるドアに歩み來つ死つづく汝にまたわが逢はむ

聲にならぬ唇の言葉に母われを言ひしといふよ甦り來よ

檐かげに一枝なほも笑くダチュラ年越に子らの歸り來む日に

はゝきくさⅢ

大須賀寿恵

雀らのこゑのかしまし遠くなりし人をしきりに恋ふる朝あけ

立ちあがるそのをりをりに座布団につまづくものかわが白き足

奥の歯の疼きは昨日よりつづき笹に休みぬ紋白蝶は

奥の歯の痛む原因の分らぬにまた一つ歯が抜かれてしまふ

抜かれたる奥歯のあとのぬめぬめと血のとどまらむときなきごとし

あかときの窓うつ雨を聞きてより下半身が痛くてならぬ

たゆき身に注射を受けむ黄素馨の黄の垂れて咲く門をくぐりて

蔦の葉の青き中より声のして露ふりこぼすは青蛙らしき

ノボタンの枝をつたひて蝸牛の仔はあかとき露のごとくならべる

カニ草の垂るるあはひより朝顔の茎のびいでて日の方に向く

三河アララギ歌集Ⅴ

夏目勝弘

左眼の飛蚊に長き尾の出たりハレー接近に係はりありや

かつて我もしてもらひし同じごとく男と女を見合ひさせをり

見合ひさせて帰りきたりぬ暫くを横たはり寝てただただねたり

煩はしと思ひし見合ひを今日我は上座に坐りて仲立ちをする

目覚時計また睡眠薬等々は我の一生に不要なるもの

手を伸ばせば逃げゆく目覚時計ありといふ我に出来ざる発明なり

眼閉づれば忽ち眠れる単純の出来ざる人を憐れみにけり

明日があるといへる言葉の虚しさを重き布団に丸まりて思ふ

短歌など作るはネクラと貶すあり秋の日の空の碧さを知るや

日に日に川の中州の広くなる冬の日差しを吸ひ込みながら

『歌集　八千代』

蒲郡　岡本八千代

御津の山大恩寺山を描きたる抽象青き君の油絵

青き実の柿の木下の小さき蔭われらかたまる君の葬りに

夾竹桃に夜の風立ちぬ夏期休暇の計画表をわがたてなほす

「緑の山河」うたふわれらの声低しピアニカの音のとぎれ途切れに

蚊取線香ひと巻きをまた継ぎ足して生徒らの作文読みつづけゆく

十三人の子宝をもちし伊藤左千夫のことを生徒らに今日は話さむ

夏休の補習授業の問題を考へてをり風吹く窓に

就職希望のわが生徒らの三十人を会社は大型バスにて迎へに来たる

見学のわれらに工場の紫の染料はただ美しかりき

酒粕に瓜を漬けむと溜屋に四升入りの空樽を買ふ

幾度も赤くなりくる水捨てて小さき溜樽ひとつを洗ふ

あすよりは奥の細道を教へむと分厚き指導書を持ち帰るなり

「奥の細道」を暗誦してゐる生徒らの声たどたどと廊下にきこゆ

弾圧処分受くるかもしれぬ「秘」の書類わが婦人部の綴に加へぬ

仏教の五色の幕をめぐらせる日泰寺にて討論はじむ

三河アララギ歌集Ⅵ　日照雨

豊川　弓谷　久子

束の間を日照雨の止みて地上より空に立ちたり初冬の虹

今朝走るオリエント急行見むとして芒の土手に立ちて待ちをり

陳列台の上に飾りぬ銀色のハイヒール胸に編み込みしセーター

舞ひ落つる枯葉の如く蝶の来て我が干す蒲団に翅休めたり

鰻など買はむと師走の町に出づ夫が戴きたる義援金もちて

廃船の傾きて砂に埋もれたり西方浜には人誰も居ず

カリカリと夫の手に今日音立つる最上川よりの胡桃の実二つ

もの蔭に雪残る日に万作の花の枝持つ人に逢ひたり

足弱く病みゐませるかホトトギス冬ざれてなほ咲き続く庭

田に沿へる用水路ここより曲りゐて一きは高しせせらぎの音

貝津丸山の我の畠は茅花の穂白き炎の如く風に靡ける

洗濯機停めたる余韻の絶ゆるまで流れる白き雲を見てをり

背のびして伸びたつ梅の枝を切る梅雨の晴間の空は明るし

柿の実のころがる路地は風の道老い猫一匹眠りてをりぬ

我が掌より幼なの小さき掌の上に移したり蛍の青き光を

儚む

東京　今泉由利

カタカゴ・ヤマスゲ・ウスレグサ・ヒメユリ…ユリ料にて私の一世ここにつらなる

人工の明りなくしてただに闇氷河の軋む音聞こえをり

まん円の月の明りの届ききて一万メートル上空飛行機の窓

ゆらゆらとゆらぎをりつつ太陽光太陽の出来こし次第をしのぶ

方角は確かではないまた会はむことのはかなさ心に残し

遠く遠くなを遠く丸き地球を行き行きてセリーナさんと出逢ひしを

バルセロナより来たりし人と共通点スペイン語ありて親しい

スペイン語ポルトガル語に紛るるを異にせざりき長き年月

極端に喜び嘆き哀しむるタンゴのなかにしばらくをりぬ

朝の陽に勝鬨橋を午後の陽は佃大橋を描きてゐたり

ゆらゆらと隅田川の川面にて太陽沈みゆきし次第を

三河湾の磯砂辺りに育ちにき地球の心を通り二万キロブェノスアイレス

父を亡くし母を亡くし残せし書籍に父を探す母を探す

彫りあげし雲中菩薩に千年の木目浮き見ゆ神々し

目覚むれば私そのもの満ち満つる思い出と思い出すこと

「情熱」

豊川　安藤和代

花言葉「情熱」と言う鶏頭よ猛暑の庭に堂々と咲く

のろのろの合風ゆえか長雨に疲れつかれて草も起きなゐ

御園座に舟木一夫のショーを見る心は踊る乙女にもどる

誘いくるる孫の心と好きな歌手幸せ喜びいっぱいの今日

お隣りの猫が遊びに日々来ればしばしの時を心遊ばす

軒下に長ながと寝る猫〝八千代〟呼べば尻尾がかすかに動く

夫婦別姓理解出来ずに逝く雲を追えば次弟に形かえゆく

真昼間は真夏の暑さ秋彼岸墓石にたっぷり水を供へり

暑きゆえ供花も造花の多くなり令和の墓地は華やぎの増す

誰れに会いに来たのか墓地をスイスイとシオカラトンボ行ったり来たり

夜の窓守宮に父の名をつけて話してる孫に胸あつくなる

残暑にも負けず野の道露草の小さき藍が秋呼びてをり

虫の声孫と並びて真昼間の暑さ忘るるほのぼのと秋

「お月様がきれいだよ」夜勤二時と言う友のラインは

秋の日の日暮れはなぜか淋しくてお隣の猫に言葉かけゐつ

仄かなかほり

豊川　山口千惠子

雨の間を出でて歩める田の中の道出穂の稲の仄かなかほり

炎天にトタン貼りゐる作業員厚く着ぶくれファン付きジャンバー

草茂る休耕田に佇立する白鷺一羽白美くしき

炎天の畑に冬瓜ごろごろところがりゐる道スーパーへの道

道端に彼岸花赤く立ち並ぶはや九月なり季節移ろふ

道端の彼岸花数本折り取りて花無き家の花瓶に活けむ

この夏の暑さに枯れしモミヂ葉ゼラニウム青き小さき芽吹き見つける

特売のシャインマスカット一房をエコバッグの一番上に

十月より値上げ定まる郵便料二円切手の残り数へる

膝つきて勢ふ雑草取りてをり何も考へずただ草を取る

赤き花咲かせ勢ふ百日草残暑とは言へぬ暑さのつづく

草取りを切り上げ一まず家の中汗にまみれし作業着重し

幾日もかけて庭の草を取るまつはりうるさし薮蚊のむれ

賜はりし紅白まんじゅう夫と食ふ敬老会の祝のまんじゅう

乾きたる鉢にこの夏殖えし緑サンスベリアに水注ぐなり

十年

蒲郡　杉浦恵美子

何時だっけ眠れぬ夜に夫の書棚探して見つけし大河小説

二・二六より八十年描く大河小説漸く最後の巻に至れり

大河小説十巻目からは我が人生重ねて読みぬ現代史の一端

注文の新本六冊届きたり何時から読まんか秋の夜長を

ずっしりと片手に重き単行本それが六冊帯も揃ひて

新参の我が書籍たち読むほどに夢中と気怠さ交互に来たらん

この歳になりて頻りに祖母想ふああ我が歳に母は至らず

我が祖母は代用食が上手かりき馬鈴薯汁粉もそのひとつなり

我が祖母の失敗作は数あれど舌に残るは梅酒のソーダ

九人の孫たちのうち我こそが祖母と起き臥し二年余りを

縁側の雑巾がけやら運針を幼き我に課しし祖母なり

厳めしく甘え許さぬ祖母なりきその薫陶が漸く解る

ひと昔よくぞ云ひけりこの十年我が集落は四人見送る

偶に見し人達二度とは逢へぬ代り新築の家三軒建ちぬ

この十年我が心にも変化あり夫生き返れとは思はずなりぬ

花ごころ

大阪　伊藤忠男

季節連れ花咲く時を待ちながら今なお暑さ蕾で耐える

名は体を表すなるはなるほどとまじまじ花弁眺めうなずく

品種増え増えに増えたり三万種蘭麝の部屋に事欠かずなり

モンキーに宇宙人あり多種多様楽しみ多きラン競う会

花瓶には一輪のみの菊の花ソファーに身置きほっと一息

満たされた心地よき時久しぶり花の魅力を改めて知る

美しさ生み出す形黄金比花茎枝も知らず知らずに

朝晩の涼しさよそに今日もまた途切れぬ暑さ夏日なりけり

虫を呼ぶ花の香りは芳しき生きる戦略素晴らしきもの

花の色いろとりどりに咲き誇る我なる我を示すその色

夏雲の隙間に僅か秋の空我待つ心知るや知らずや

懐かしき春の花々思い出す今は四季すら感じなくなり

蝉代わり虫鳴く声の朝な夕気分だけでも涼やかなりや

歳時記の書き換えいるや四季崩れ今日は「更衣」も意味なさぬなり

人生は短き春に例えらるならば我等は花でありなん

庭中改修（その八）

豊川　白井信昭

隣村よりくねる道ぬけ農水の暗渠（あんきょ）あふるる水激つ音

束（つか）の間を雨上がりたりみ社の森に掛かりし美（は）しき虹見ゆ

近くして三ッ相町の本宅に家族三人今日より住まむ

豊川の渡津橋より道変えて堤防行きぬここ三ッ相町

本宅に今し着きたり家の前往復を子に教えられつつ

九月厳しき残暑豊橋の街中通り帰り来たりぬ

裏道の夜ともなればＬＥＤ灯三か所に照らす百日紅（さるすべり）の花

生垣の水捌口の前後羊歯伸び茂る所となれり

引越了え息子誕生日のばし来て今宵自宅に家族パーティー

持ち帰り中華料理を食卓に五人それぞれ好みのメニューを

開け放し廊下窓際朝掃除飼い猫クゥは横たわりいる

生垣の正面第一支柱間思いつくままに踏台を築く

垣根まで石積みの路整えて車庫の床より上下叶う

東の今宵中秋の月待てばまんまる高く澄みをり

入出口中間支柱豆板の隙間補強に細石埋まる

秋めきて

埼玉　矢崎直人

教養をソーシャルワークの実践にするためにまず言葉身近に
綴られるソーシャルワークの実践のその奥底に人のいること
休んでもいられる場所を求めいるそれでもいられる場所であるのか
ことわりの幾つを知って身につけて世の物差しの増えてくことよ
目的を失わないである姿幸福追求支える支援
取り敢えずやれるとこまでやっていくペースをつくるやれるとこから
郵便の値上がり紙が音を上げる日本の文化紡ぎいだした

やったことみていてくれる人のいることに気づき信じていける

人類が生き残るための考えを政治に求める荷が重すぎる

ＡＩにどんな言葉を覚えさすＡＩ学べぬ心の現れ

模擬試験いつもより早く出る国家試験は五カ月ののち

志し高く抱きて読む者にせまれる言葉ユーモアも持ち

スマートフォンカバーが駅のホーム落ち駅員さんに拾ってもらう

普段とは違う曜日の目覚ましをかけ忘れおり慌てて起きる

秋めきて朝晩涼し太陽の遅くに上り早くに下りる

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

宇連ダムは十パーセントの貯水とふ待ち侘びし雨やうやう降りたる　　森　厚子

ティンパニの良質の音鳴り響く待ち侘びし雨が雷も聴こゆ

光眩し一秒経ずして鳴り響くまさにこのこと電光石火か

雨乞いする程の欲しい雨降り、その夜更け。蒲郡で土砂崩れの一報にフェイクかも・・・と。無事を祈りました。

熊の絵の看板横目に息あげて目指す山城箕輪岩櫃（やまじろみのわいはびつ）　　水野絹子

榛名の神怒り鎮めよと祈りしか妻子と共に甲冑の人は

勝頼の待つは真田の忠心か名も堅固なる岩櫃城よ

砦のような山城にも「馬出し」（武田氏発祥）があり、真田氏の複雑な心情が伝わってきました。

暑き中行列続く人気の店ジェラート一つやうやくの味

牧原規惠

渡り行く瀬戸大橋の真下には思ひがけずにうづ潮を見る

淡路島は大き大きな島なりき美(は)しき緑の中を縦断す

人気の物を調達するには粘り強さが必要なのですね。私も娘と孫につき合い並んで調達しました。

友よりの残暑見舞に風鈴が描かれてをり一瞬風立つ

稲吉友江

戦争を語る事なく逝きし父七十九年目の今日も青空

「無骨なる手は勲章」と言ひし母施設に暮らせばしらうをの手に

母は若き頃から働き者。無骨な手は恥かしくないといつも自慢してました。今母の手を見ると悲しくなります。

時々に名を違へては正しつつ息子ら家族と今日の夏の日

鈴木美耶子

この部屋に集ふ十人はみな『鈴木』息子ら家族ももちろんわれらも

エレキベース孫は弾くとふわが思ふコントラバスとは異なるらしき

五年振り、いやもっとかも。息子ら二家族みな揃い食事会。驚くばかりの孫らの成長。夢のような夏の一日でした。

折りたたむ傘も持参のこの日照りファン付き上着は入荷は無しと

牧原正枝

ブルーベリー実の小さくて葉は黄色まだ続くのか猛暑に干ばつ

電源も切れているのかつながらぬ暑すぎお盆の予定変へたき

あまりにも暑く人も植物も息切れしそうです。その上地震にゲリラ豪雨と大変な夏でした。

六六魚陸封の魚サクラマス海へ帰る日夢見ていむか

耳敏く配膳車の音聴きとむるベッドに伏して歩けぬわれは

緑なす山と雖も一部分茶色混じりて秋が近づく楽しみは三度

思いがけなく入院生活が始まり、約一か月があっという間に過ぎました。長いような短いような。もう少し頑張ります。

ゆくりなく入院生活一か月ウイークデイはリハビリをする

担当の看護学生初々し学ばせて貰ふと今日も言ひたり

秋祭りの号砲響く朝まだき季節感なき病室にをり

思いがけない脳腫瘍手術、その後に予定の放射線治療。先月古稀を迎えた私ですが、まだまだ生きなければ。

大武智子

現代学生百人一首

東洋大学

不織布を「ふしき」と読んじゃう君だから不思議な君を僕は読めない

芝浦工業大学柏高等学校３年　**小野　陽平**

「眩しいね」「猛暑日だもんね」そうじゃないあなたの笑顔と光る汗だよ

千葉県立千葉中学校３年　**但馬　凜**

体操の最終種目鉄棒の止まった着地止まらぬ涙

千葉県立千葉西高等学校１年　**浅海　綾音**

休日に壁越しに聞く会議の声優しい父の上司の一面

千葉県立八千代東高等学校１年　**鶴岡　彩音**

『外出自粛』自粛疲れのストレスを戦闘ゲームにぶつける私

松戸市立旭町中学校1年　**星　夏穂**

父の指赤く染めてくアルコール白衣の下に覚悟を決めて

慶應義塾中等部3年　**髙倉　綾乃**

突然のゆれと泣き声ふるえる手十年経ってもあせない記憶

慶應義塾中等部3年　**水落　眞琴**

昼食でマスクをはずす違和感がコロナ禍にいると再認させる

慶應義塾中等部3年　**三谷　力輝**

『俳句』

宵寒の小雨となれり木挽町
もの多き机上にひとつくぬぎの実
地境や石の割れ目の竹落葉

植村公女

おはようの掛け声やさし木槿かな
土けむり命弾むや体育祭
浄土への道を飾るや曼殊沙華
狭き田の実りたわわに稲薫る
秋清かラップかけたる朝餉かな

木村歩歩

菊月や会津のかおりてふ蕎麦粉
一面の刈田の向こう平泉
アルクトゥールスの輝き野分去る

今泉如雲

秋寒しスマホのカバーを落としたり
アポリアはアポリアのまま鰯雲
秋愁心と体を休める日
試験まであと五カ月や夜長し
秋の朝日が昇るのを待ちて起き

矢崎直人

つれづれの秋の一日のつれづれの
はるかなる極楽浄土を想ひをり
こぶし葉に朝日射し来し輝やけり
瞬間と瞬間の間に銀杏散る
万代の春の終りと一葉落ち
琵琶の実の一個の重さ掌に
現実は今日の秋日のごとくあれ

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

木風

台風に海も大地もなかりけり
赤とんぼ台風一過スイスイと
寒蝉が急ぎ鳴き鳴く裏山で
秋さやかいさおし人が思わるる
この夜は反輪の月澄みわたり
明月や草木の蔭のやわらかさ
寝静まり畳の下に虫を聞く

雄山

カラオケのＡＩ採点一喜一憂
秋暑し涼しきカフェの読書かな
夏終り君が代恋しオリンピック

夏の朝尾長どり泣き起された
熱帯夜月を見ながら戸閉す

文字摺のピンクの小花はひだり巻
畑中にまんまる西瓜出荷待つ
山百合の花数多し傾げる
茎だけのマンジシャゲ秋岸
大雨と大風予報稲を刈る

つね子

白菊の遺影に向かい弔吟

恵風

秋彼岸被災地襲う豪雨かな
在りし日の母想い出す後の月

菱泉

折々の詩（九）

ふじの　けんじ

Questa citta mi ha rubato la vita.

雨がまだ地面をたたいている
街灯がぼやける冷たい夜
フィレンツェの街は
ひっそりと

誰かが来るのを
待っている

一人の老人が
道端で大きな声で　叫ぶ

俺の人生は　この街に
盗られてしまった

雨はまだ降っている

フィレンツェの街は黙ったまま
たたずんでいる

鳩が一羽
老人の傍らを　歩いている
後悔を　引き連れながら

雨はまだ降っている

五感を澄ませば（29）

杉浦恵美子

もののあはれ

最近二部全十二巻の大河小説の最終巻を読み終えたばかり。

きっかけは、その頃読む本がなくて「何かないかな」と夫の書棚を物色したことから。

それまで背表紙を眺めてもスルーしてたのが、その時はふっとこれ読んでみようかなという気になったんですね。

読み始めたのが何時頃だったのか覚えていませんが、二年以上は前だった気がします。

夫の蔵書の第一部七巻を読み終えて、夫の知らない第二部を買い足してようやく。

いやぁ達成感がありました。

もちろん所々は退屈だったり、気分転換に他の本を読んだりもしましたが、終章に向かって読み進める頃は、作家が私に乗り移ったよう。

その大河小説は、加賀乙彦著『永遠の都』（第一部）『雲の都』（第二部）。

作者は昨年一月に老衰で亡くなりました。

自伝的要素があるため、特に回想部分の凄い記憶力、想像力、第一部から沢山ある伏線を終章に向かって全て回収する構成力、創作力、この地球上のあらゆる事象や芸術に対する博識には舌を巻きました。

さて夫の生前にはこの書を話題にすることはなく、どんな感想を持っていたか不明ですが、もしテーマについて語ったら何と言ったでしょうか。

うーん。何とでも言えそう。つまりひとつに絞れない。

ところで、今大河ドラマで改めて脚光を浴びている「源氏物語」も五十四帖もの長編。光源氏を中心に様々な人物が登場し、複雑な物語が繰り広げられます。

ではこの作品のテーマと云ったら何？

こちらは一言で表せると云います。

もののあはれ

たしかに。古語って便利。但しこれ以上の説明を求めても暈されるだけでしょう。

つまり日本語は「それ以上は言わない」ところに奥深さがあるのではないでしょうか。

ところが現代はきっちり言わないと「説明不足」と受け取られてしまう傾向があるような気がします。

しかし黒白をつけるのが当然という価値観中心の外国人の中にも、日本語の曖昧さを知って、その方が却って平和で楽に暮せると感じる人も増えてきたようです。

さて「もののあはれ」に戻って、

源氏物語をはじめ以後多くの物語は、どのようにストーリーが展開されようと、どこかにこの理念が感じられます。

では、短歌（和歌）の場合はどうか。

例えば歌を詠もうとして、

感動の中心となるのは一言で言えば「もののあはれ」ではないでしょうか。

辞書的な説明では

「折に触れ、目に見、耳に聞くものごとに触発されて生ずる、しみじみとした情趣や、無常観的な哀愁」

（ウィキペディア）

「人が自然や人事の諸相に触発されて発する感動である。（中略）最も人間らしく、素直でしみじみとやさしい情感を催し、その意味で対象を識別し得る能力を具えることであり、それは世態人情に通ずることによって得られる」

（改訂新版世界大百科事典）

つまり、作歌の場合は物語とは逆に先ず「もののあはれ」ありきなのでは。

いずれにしても意識してもしなくても日本は「もののあはれ」に満ちていると言えそうです。

だから読んだばかりの大河小説のテーマも「もののあはれ」と言っても許されるかもしれません。

先日久しぶりに幼馴染に会い、読書情報を得て刺激され、次の作品に取り組む意欲が湧いて来ました。

熱中する作家を語る友に会ふそうだこの人無類の読書家

附　録（二十九）

矢　崎　直　人

秋寒しスマホのカバーを落としたり

駅で電車を待っている間に、ホームの下にスマートフォンのカバーを落としてしまいました。カバーのプラスチックの部分が割れていてスマートフォンの本体が落ちやすくなっていました。電車が来てベンチから立ち上がろうとしたらスマートフォンが飛び出して下に落ち、カバーが手から離れて電車とホームの隙間に落ちていきました。駅員さんに事情を話し、取得器で拾ってもらいました。電車の下にまで落ちたのがスマートフォンの本体ではなくカバーだったのがまだよかったです。

スマートフォンカバーが駅のホーム落ち駅員さんに拾ってもらう

秋の朝日が昇るのを待ちて起き

朝、日が昇るのが遅くなってきました。また、日が落ちるのは早くなりました。日の出が遅くなり、気温が上がらないので朝起きるまでに時間がかかっています。これから寒くなるとますます朝起きるのが辛くなるなという気がしてきます。仕事が終わってバス停で帰りのバスを待っている時、職場を出た直後はまだ日が残るものの、バスが来るまでの間に日没をむかえます。季節が動いているのを実感します。

秋めきて朝晩涼し太陽の遅くに昇り早くに落ちる

『寒露から立冬へ』

中屋保之

十月も十日を過ぎた頃に寝具等を「秋・冬バージョン」に替えたが、日中との温度差に衣類の選定にも難儀をしている。ちょっと早まった!?とはいえ、朝夕の涼風にようやく秋の気配を感じるようになり、例年とおりとはゆかないものの季節は移ろっているようである。

稲刈りが終り農作物の収穫期にあたる候を、二十四節気では「寒露」と呼ぶそうである。また、「秋麗＝あきうらら」も風情がある。石川桂郎の〝学僧の　ふどしが干され　秋麗〟は、ふと目にした厳しい学僧たちの修行の明け暮れのなかでの光景なのであろうか。私の眼には、奈良辺りのそう大きくはない、ひょっとしたら少し崩れかけた辻塀から数個の実をつけた柿の木が覗く古刹が浮かぶ。

古今和歌集に、

ふるさととなりにしならのみやこにもいろはかわらずはなはさきけり　　**ならのみかと**

《すでに廃都となった荒涼たる平城京なので、今では昔の面影がなくなったけれど、花というものは、色は変らずに昔と同じように咲く　　奈良帝》

作者の「ならのみかと」とは、八〇七年ころの平城天皇（奈良帝）と伝わる。嵯峨天皇との確執により退位後に戻った奈良で昔を偲んで詠んだ歌だそうである。

いま私が通っている詩吟教室では「角光嘯堂作　旧都の月」を習っている。本詠の前に、短歌が入る。

故里となりにし　奈良の都にも
紅葉散りしく　秋は来にけり

これを『本歌取り』というそうで、『本歌』への広く深い知識とそれを活かす技巧を要するのであろう。

季節は、『寒露』初候の「鴻雁来＝こうがんきたる＝冬を日本で過ごす雁が北から渡ってくる頃」、次候の「菊花開＝きくのはなひらく＝菊の花が咲き始める頃」、そして末候「蟋蟀在戸＝きりぎりす　とにあり＝戸口で秋の虫が鳴き始める頃」に移行し、やがて冬へと向かう。

「旧都の月」の中に〝絡緯声は悲し三笠の秋〟とある。絡緯は、こおろぎ若しくはきりぎりすを指す。

旧き都に来て見れば　浅茅ヶ原とぞなりにけり
月の光は隈なくて秋風のみぞ身には泌む

『酔いの徒然』（一五一）

丸山酔宵子

『澄んだ光の田中一村展』

９月も終わり近くになっても、毎日３０度以上の異常気象が続く毎日であるが、今日は朝からしとしとと小雨が降ったり止んだり。

今日は９月末の金曜日である。小雨もやんだので、傘も持たずに月末の支払いのため銀座に向かったのである。

いつものみずほ銀行銀座支店で数件の振り込み後、お昼近くになったので、いつも行く西銀座デパート２階にある「上海湯包小館」で、定番の肉汁たっぷりの小籠包と海老レタス炒飯を注文。窓越しからは数寄屋橋西銀座デパートの有名な「宝くじ売り場」が見下ろせるが、行き交う人たちは傘、傘、傘、矢張り雨が本格的になったようだ。

秋雨や肉汁熱し小籠包

酔宵子

西銀座デパートを出て、雨に濡れないように、数寄屋橋交差点地下から日比谷線に乗り、９月１９日スタートの「田中一村展」に上野東京都美術館へと向かった。

田中一村という画家の名前をはじめて知ったのは、今から２５年程前。田中一村という名前が世の中に、珍しい存在として、ちらほら出てきた頃であった。

たまたま、熱い夏の日、北の丸公園の東京国立近代美術館で大々的な「ゴーギャン展」があり、その帰りに自由が丘の行きつけのバーで飲んでいた時、「日本のゴーギャン」と言われる田中一村の話になったのである。

突然、隣のネクタイをきちっとした紳士が話に参加してきて、「実は、私の女房は奄美大島出身で、田中一村のことを良く知っている」とのことであった。

ゴーギャンと一村出会ふ熱帯夜

酔宵子

自らの芸術の探求に生涯を捧げた孤高の画家田中一村。

１９０８年彫刻家の父の６人兄弟の長男として栃木県に生まれ、若くして南画の才に恵まれ、７歳にして米邨（べいそん）と号して数々の賞を受賞している。

１９２６年東京港区芝中学校から東京芸術大学日本画科に入学。同期では、彼の東山魁夷、橋本明治らがいたが、学校の指導方針への不満や父の病気などが原因で２ヶ月後には中退してしまうのである。

１９３１年それまで描いていた南画と決別し、自らの心のままに描く日本画へと独自の路線に進んで行くのである。

１９４７年川端龍子主催の第１９回青龍社展で「一村」と名乗り始めて入選したのである。しかし、その後「日展」をはじめ数々の展覧会に出品するも落選の連続であった。

１９５８年第４３回「院展」に出品するも、またまた落選し、中央画壇に絶望を感じ、絶縁。奄美行を決意し、同年１２月１３日に奄美大島名瀬港に着くのである。

今回の展覧会では、神童と呼ばれた幼年期から、終焉の地である奄美大島で描かれた最晩年の作品が丁寧に展示されている。世俗的な栄達とは無縁な中で、全身全霊をかけて描き続けた作品群は、田中一村の「描くこと」への不屈の情熱を観るものに訴えかけてくる。

展覧会場の最後には、有名な「アダンの海辺」が掲げられている。奄美の海と砂とアダンを、澄んだ光に溢れた筆使いで描いているが、そこには田中一村の署名（サイン）が一切無いのである。

「アダンの海辺」の横に小さな田中一村の言葉が掲げられている。

「・・海と砂とアダンを全身全霊で描き切ったので、サインする力も残っていない・・」

と。

光射すアダンの外は薄紅葉

酔宵子

奇なる話　輪廻転生

高　橋　育　郎

生あるもの、必ず死す。

死は古くなった体や傷ついた体を、新しくさせるためで、新しくなった体は、再び生命を与えられ、そして蘇る。生まれ変わるのだ。

生まれる前は、何一つ覚えていないが、生命体は生に向かって、エネルギーを蓄え、力を漲らせ、誕生の産声をあげる。そして育っていく。

そこで育ち方が大切な問題になってくる。地獄や極楽が待って居るからだ。

「地獄　極楽　閻魔様は怖い・・」嘘をつくと舌を抜かれる。私が子どもの頃は、通り道に閻魔様の大きな絵があって、怖かった。

さて、成長していく生命体は老化し、遂に死にいたる。そして、再び生を与えられる。

この生死の繰り返しが輪廻転生。だから生命体に終わりはない。
死してから生まれるまでは、無意識の世界。
生まれるまでの時間も、さまざま。
人間が人間以外の生物に生まれ変わることも、多々ある。
「私は貝になりたい」という言葉もある。
勿論、何に生まれかは、選ぶことはできない。
すべては、運命の導くまま。なんと不可思議なものであることか。
それでも死は理屈ではない。やはり寂しいものだ。
死んでしまえば、分からないというものの、死にたくないとおもうのが人情だ。
来世に極楽を望むなら、正しい道を歩まねばなるまい。　（終わり）

絹の話（168）

「アトリエトレビ」今　泉　雅　勝

魚が食べられない

海が化学繊維などでこれ以上汚染されると、異常気象もさる事ながら魚が汚染されて食べられなくなります。福島の原発崩壊でその現実が示されました。

家畜の歴史

人類は氷河期末期狩猟生活の中で犬を友としました。農耕生活が始まる一万年位前の新石器時代になると、羊、やぎ、豚、蚕などが世界の各地で次々と家畜化され始め、やや遅れて牛、更に遅れて6千年前頃には馬、鶏が家畜となりました。人が食糧を備蓄し、食べ残しをする様になって、猫が加わりました。

農耕牧畜が発達し、食物確保が安定して人が定住する基礎が出来たのです。

すでに、この時代には魚以外は殆どの食物は人が人為的手を加えたものとなり、野生のものとは違った食味感になって、昨今のブロイラーやハウス野菜のように柔らかくソフトな味に変化して来ました。

その間、人々はたゆまず森林などを開拓して自然の形態を変え、さらに何億年か前に地中に封印された石炭や石油を掘り出し、今日の繁栄を手に入れました。地球環境の劣化と人の繁栄は反比例しているようです。

うまいもの

人の食味感は顎の発達状態で変化します。急速に顎が退化して来た昨今の若者には柔らかい物が「美味しい」大きな要因になって来ました。

もう30年余り以前の事、私の友人が薩摩シャモより原種に近い「奥久慈シャモ」の養鶏に成功したので、このお披露目に某放送局と組んで街のイベントで「シャモの唐揚げ」１０００羽を提供した所、若い女性に固いと言われ、あまり人気がありませんでしたが、この様子が放映され、後日このシャモが有名ブランドとなると、女性を含めて多くの問い合わせが有り、現代の「うまい」とは情報がそれを左右するのだと自問しました。

魚で言えば、同じ鯛でも荒海の鯛は人工飼料の養魚の鯛とは違う魚ではないかと思われるほど食感の違いがありますが、柔らかさが喜ばれる時代になりました。

路地栽培の野菜とハウス野菜とは香りや食感の違いばかりか、繊維質の量やビタミンなどの栄養素に格段の違

いがありますが、それでもハウス野菜の方が綺麗で人気です。「美味しそう」な事が大事なのです。

ハザで干した米、日の光に干された海苔などの旨味が忘れられないのは私だけでしょうか。

変わる台所と地域差の縮小

最近のデパ地下はどこのデパートでも、全国至る所から食材が届き、活気に満ちています。家に帰って電子レンジで温め食卓に並べ直せば夕食です。

地域の味も家庭の味や母の味も薄れてきました。

おせち料理も買って食べる時代になりました。

周囲をよく見ると、着る物も、家の造りも地域差が無くなって来て、車窓の風景の楽しみも薄れてきました。

ご遺体が昔ほど傷まない

かなり昔の話になりますが、夏のある身内の葬儀の時遺体の周りのドライアイスが少ないのに気付き、年配の葬儀屋の担当者にただしたところ、「最近のご遺体は痛みが遅くなりました」という返事に唖然としました。

今日の人は日常生活で様々な食品から防腐剤を摂取していて、それが体に蓄積された結果と思われます。

いずれ許容量を越す時代が来たら原因不明の病に侵される人が次々に現れて来るような気がします。水俣病などもその原因が暫く判りませんでした。

魚だけが野生食

今日では養魚が急速に発展して来ましたが、まだまだ主に野生の魚を捕獲して食しています。

しかし昨今では海洋にプラスチックや化学繊維のゴミが海洋を汚染し、これが波などで破砕されさらに超微細なナノ構造物質になり、地球温暖化の元凶になる一方、これを魚が捕食して魚の体内に化学物質が蓄積されて、もうこれ以上天然の魚を食べてはいけない時代が間近に迫っています。

絹で環境健康保全

現代の人間の営みは他の生物に比べて膨大なエネルギー消費の上に成り立っています。

天然繊維でも綿は大量の農薬が使われる事が一般的で、環境破壊とそこで働く人の健康被害が心配されています。羊毛は広大な原野が切り開かれた産物です。

省エネが叫ばれる今日、絹を作る蚕の食べる桑の葉には農薬は厳禁です。絹を環境と健康を守る素材として新たな利活用を思考しなければならないと思います。

「江上浩二の独り言」83

江　上　浩　二

歴史・考古学が面白い②

十月号に引き続き、「歴史・考古学が面白い」を深める為に、特にルーツについて自分の身をあるところに置いて独り言を呟く。十月号で人のルーツについては、どこかに自分に似た人がいる風に少し書き始めたが、今回三つのルーツについて、第一は自分のルーツから、第二は現代人のルーツ、そして第三は縄文人のルーツについて、解説風に呟いてみる。

一．自分のルーツ・母方と父方

弥生後期の人骨形態学による再現古代人の顔が母方の祖母（本家は埼玉県鴻巣）・叔父さん（埼玉県在）にそっくりで、これは初期の人骨顔再現法でもこんなにそっくりさんを再現出来るのだという、表現のしようがないくらい驚いた事とこんなに身近な係累で自分の出自が解ってしまう事は驚きを沈めさせてくれた。関東北部の群馬県の榛名山近くと記憶している遺跡からの遺骨を分析・再現した研究成果だという。

もうひとつ、父方についても次の検証があるのだ。二〇〇六年の秋、二〇〇八年の夏にオリンピック開催の決まっている北京を訪問し、その際で時間が前後するが、日本へ帰る日、知り合いの中国人のお母さんがホテルまで見送りに来て頂いた。背が高く、面長の顔、中国の北部に多い民族を代表するような目も細い。亡くなった叔母さん・父の姉にそっくりだった。父の姉は、四十台で死んだ祖母（本家は埼玉県の戸田）とそっくりだったそうだ。背丈は違うが、面長の顔はそっくり。叔母さんの娘・従兄妹・既に病死は、もっと似ていたような気がした。

北京で企業訪問の日、訪問で行き先が分からず、タクシーがやっと目的地に着いた。降りて若い人にお邪魔すべきビルをタクシーの運転手が聞いた。また、吃驚。その若い人の顔が私の従兄弟・父の弟の息子にそっくり。歳はいとこよりやや若いが、背丈、顔かたちがそっくりだった。北京へ来ているはずは無い。このいとこの顔は私と血の繋がりの無い、伯父さんの連れ合い・伯母さんの系の顔で漢民族とは違い福建・広東系の、私の体験では香港でよく見かけた少し年配のご婦人の顔が伯母のお母さんに非常にそっくりであった、

中国の人口は十三億人、それも単一民族ではなく、南方系、北方系だけでなく、もっと複雑な古来からの民族の集まりが中国をなしてきた。周辺の国々も、南はベトナム（漢字で越と書きます）、朝鮮半島の北・南、昔なんて国境もいい加減、人の往来は戦争や事件で逃げたり、避難したり、貧しさから逃れるために移動してきたはずで、人口1億の日本民族も単一でない。中国、朝鮮半島と似た図式であろう。その証拠に、ちょっと出かければ、人口が十倍だから、知っている人に似た方を見出せる確率が高いのであろうと納得した。

二．現代日本人のルーツ

ここからはDNA研究者の解析結果である。

父系のDNAで表記すると概ね次の四種類、オホーツク人C2・縄文人D1a・長江弥生人O1b2・漢人O2で構成されていて、青森県・東京都・静岡県・徳島県・九州・沖縄県において、全ての県で縄文人が一番多く、その比率は６０超から３５％で異なる。弥生人と漢人を加えた3DNAの比率は９５から８０％で主要構成。各県の特徴として沖縄が縄文人６０％超のトップで、九州は弥生人と漢人の合計が６０％でオホーツク人が混じる、徳島は九州に比べ弥生人と漢人の合計は５０数％で少し小さい、静岡はこれら２つのDNAは６０％を少し超え弥生人の％が大きく３５％を示している。東日本の東京・青森では縄文人の比率が５０％程度に増加して、オホーツク人と弥生人亜種O1b1と表記される長江越人が数％あることを特徴とし、東京と青森の差異は青森の方が縄文人が少し減った分オホーツク人と越人が増えている。東京の方が、縄文人の％が少し大きく、その分オホーツク人と越人が少なく、東日本では東京の縄文人が多いのである。私の個人的興味は、記紀等から東日本で大国であった日高見国の情報が消えている理由などが遺跡の人骨DNA解析で解明される事を期待したい。

三．縄文人のルーツ

DNAのゲノム解析で判明しているタイプはD1aである。

氷河期の三万八千年前に、アフリカを出発した現生ホモサピエンスは、アジア大陸へ、そして日本列島に到達、しかしスフール大陸・オーストラリアまで南下したGrが再度沿岸を北上したGrと途中でアジア大陸内で北上したGrが樺太経由南下して、列島に到達したと考える。これらの南方系Grと北方系Grが混血して縄文人として日本列島内外で活動したと思われる（D1aという男系縄文人DNAの呼称）。

＊注　後年十二世紀ごろに北方より北海道に南下したアイヌのDNAはオホーツク人と縄文人固有のD1aの二種から成っており、縄文人の％は８０％と非常に大きい。

研究参照　篠田謙一氏　佐賀医科大　＊発掘された人骨の歯を中心に解析

斎藤成也氏　国立遺伝学研究所　＊ヤポネシアゲノム研究関連

余談ではあるが、時代的には日本の縄文後期にあたるアイスマンのDNAは詳細に調べられて、wikiに紹介されているが、背丈は１６０㎝で目は茶系だそうで、現代の我々が思い浮かべる白人系の背が高い人種ではなく、少し西域アジアに見られる人種の様であった。

十月号中の訂正

アイスマンは五千年前　訂正　五千三百年前

完

初狩便り（36）

花野みぷり

ほたる再生プロジェクト　その３

九月十日、初狩小学校四年生十三人と教師三人がカワニナ獲りに挑戦した。「笑顔の田んぼ」の内山さんと丹さんは軽トラックにバケツをたくさん乗せ、笹子川が蛇行して浅瀬になったところで、一行を待った。

八時五十五分のバスでやってきた子どもたちに、「カワニナはホタルの餌です」「カワニナはこんな貝」「大きな石をひっくり返すといるよ」と説明して捕獲開始。男子も女子も楽しそうに、「これがカワニナ？」「見て見て！」「でかいの見つけた」。石に張り付いたカワニナを見つけてはバケツに入れる。だんだん上手になり、全員がカワニナを獲ることができた。途中からはカワニナ獲りが、プール遊びのようになり、川のなかで大騒ぎ。「俺　毎週こういう授業がいい」四年生の夏の良い思い出になったかな。

捕獲した二百匹ぐらいのカワニナをバケツに入れ田んぼの畔にやってきた。夏休み前に四年生が育てたホタルの卵を放流した場所だ。何ヵ所かに分けカワニナを放流した。

来年の六月、ホタルが出現したら、五年生になったみんなとホタル見物するのをとっても楽しみにしているよ。

（写真・内山和夫）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2024年9月25日

寒さを感じない様にしましょう

ここ数日で切り替わるように
急に秋を感じる様になりました
前回の秋を感じた時と
比べ物にならない涼しさにビックリします
ここで大切なのは
寒さを感じない　寝具　服装選びです
夜中や明け方に　寒い　と感じて目を覚ますと
身体が冷え切ってしまい体調を崩しやすくなります
どうしても
最近までの暑さのイメージが頭を離れませんよね笑
しかも
また気温が上がるんじゃないか？
と疑心暗鬼にもなりやすいです
ですので
睡眠時の服装も大切ですが　掛け布団　を
少し厚めにすると良いと思います
暑ければ無意識にはがし
寒ければそのままかけ続けます
秋らしい秋の到来に少しホッとしました
今日も笑いながら楽しんで行きましょう

2024年9月27日

排出させる好機

日々や朝晩の寒暖差に
身体がこたえるここ最近です
気温が落ち着ちつくと　蚊　も元気になり
季節外れの蚊取り線香が活躍し始めます
気温が下がると
水分補給をちゃんとしている方は
尿　がちゃんと出る様になり
回数が増えて来ます
これは
暑くて汗で体外に出ていた水分が
ちゃんと腎臓にまで届き　尿とし出る様になった為
です

ということは
血液中の必要のない物（ウイルス　脂肪　化学物質
　添加物）
などが　きちんと体外に排泄されるということです
3S＋ゆたぽん＋ヨーグルト＋八分＋湯船
特に　1日8回以上　が出る水分量をしっかり摂取
し
尿と便をしっかり出して行きましょう
その時
尿や便の色や匂いもチェックし
体内の状況を確認して行きましょう
汗をそこまでかかなくなったら
水　を飲料として大丈夫です
今日も笑いながら楽しんで行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

「月の満ち欠け　心身と」

月は一月間（ひとつきあいだ）にて
満ちたり欠けたりしているぞ
この満ち欠け　人間の
陰陽変化をもたらして
膨張・収縮　繰り返し
これが命の循環を
作る原動力となる

月が満ちていく時は
身体内側広　がりて
様々なものが入り込む
飲食・栄養だけでなく
頭の情報　取り入れやすく
心身満たされ充実す
この時しっかり学んだり
行動・経験　していけば
陽の膨張　極まって
発散・区切りで　陰へと転じ
自分の内へと　落とし込む

月が欠けていく時は
徐々に内へと　収斂し
不要なものが外に出る
貯めて来たもの　過去のもの
余分や無駄を手放して
老廃物まで出し切るべく
この時しっかり休息し
自分の内と向き合って
陰の収縮　極まれば
内燃湧き出て　陽へと転じ
新たな吸収　始まるぞ

月の変化は　心身変化
膨張・収縮　繰り返し
取り入れ・排出　促され
心も体も成長す
月の変化を利用すりゃ
成長変化の陰陽も
楽に物事進むなり

「皮膚の冷えは肺の冷え」

皮膚は皮毛というなりて
五臓じゃ肺の受け持ちで
皮毛と肺は一つの機能の
表と裏の関係なり
肺と皮毛は　外感機能
常に外と接触し
空気を通して　外界変化
感じて体温調節す

秋から冬になる時は
外気に涼気が増えていき
湿気も減って乾燥し
この気が皮毛に触れるなら
表皮を閉じさせ　乾燥し
皮膚の状態　緻密にし
外の寒さを防ぐなり

夏に暑気が強い年
秋が短く冬になりゃ

皮毛の毛穴や汗腺や
血管などの体温調節
負担が大きくかかりすぎ
皮毛の陽気や潤いが
虚して弱って　冷えていく

皮毛の冷えは肺の冷え
虚した皮毛は防御が弱く
秋の涼気や冷えの気に
争う力がない故に
鼻水・咳や発熱し
風邪（ふうじゃ）や寒邪（かんじゃ）負けるなり

秋から冬の養生は
皮毛と呼吸が要なり
衣服を整え冷やさぬようにし
お風呂の湯船で温まり
心の底から落ち着いて
深い呼吸で生活せよ
落ち着く呼吸が皮膚助く

陽八月作有り

殿山木風

近年の三夏 処するに勝え難し
生気何れに求めん 暑蒸を避くるに
夜熱収まらず 睡臥を侵し
暁光赫赫として 東より昇る

陽八月有作　令和六年

近年三夏處難勝　生気何求避暑蒸
夜熱不収侵睡臥　暁光赫赫自東昇

（語釈） o陽八月…陽暦（今の暦）の八月。o三夏…夏の三ヶ月。o処する…対処する。o生気…いきいきとした勢い、趣き。o暑蒸…むしむししとした暑さ。o夜熱…夜まで残る熱さ。o睡臥…睡り。o暁光…明け方の太陽。o赫赫…盛んに日が照り輝くこと。

（通釈） 近年の夏は過ごすには耐え難い。蒸し暑さを避けて生気を得るのにはどうしたら良いであろうか。夜は暑さが収まらず、睡眠を侵され寝不足となる。そして夜が明けたら早くも東より太陽が盛んに輝き昇って来る。

※　地球が壊れてきた。雨が降れば集中豪雨で大洪水をおこし、地球は乾燥仕切ったような具合で、あちらこちらに山火事が絶えない。日本近海の温度も上がり、南の魚が生息するようになった。秋刀魚もそうだが、今年は特に烏賊が取れないそうだ。故郷に帰ったら割烹の生け簀の前に陣取り、烏賊の生き作りで一杯が楽しみだが、それが出来ないとなると寂しさこの上ない。と、こんな悠長な事を言ってはいられない。

　温暖化は随分前から危惧されてきているが、現実は核心に迫れないで居る。地球全体のことだから難しい。ましてや世界に戦争が絶えない。地球を俯瞰できるような神のような存在があったら、戦争処ではないだろうと云うに違いない。万物は地球の自然あっての事だが、現実は戦争と自然の破壊が同時進行中だ。世界戦争を繰り返す危険性をはらみ地上の英智は手を拱き何も出来ないでいる。一見平和そうな我が国だが、一皮むくと、とんでもない長い酷暑の中に地球が壊れて行くような限りがない憂慮ばかりの中にいる事を思う。

　　寒蟬が急ぎ鳴き鳴く裏山で

編集室だより【二〇二四年十一月】

今泉由利

歌集「地球にて」

一九七八年

地球儀に線を描きて確かむる幼児携え七十二時間の旅
淡々(あわあわ)と湯気のやさしき酒饅頭食みていで来ぬ父母のもとを
秋になる雨長々と降りそそぎベニハベゴニアは根腐れとなり
南十字星の高くに見ゆる季(とき)となり日本より帰り常の日となり
日本に一年の1／4を過ごし来てコバルトブルーの蓋があかない
ジンジャーの花はまさしく香りおりサントスへゆく煙害の道
タラップを降りつつしたる深呼吸ブラジルの国にはブラジルの味
スペイン語ポルトガル語英語の機内にて私は読み続く万葉秀歌
白飯に白菜漬けの朝食の吾が子はアルヘンティナモデロの二年生なり
地平線まで続く平らなカンポに慣れて易易(やすやす)暮す日本人私
朝市にマモンデアマソナを五個買うにポルトガル語を使いてみたり
二三日をポルトガル語にて過さむと坂道多き国の地図を買いたり
トロピカルの名知らぬ果実の並ぶ中大根もあるブラジルの市場
ブラジルの朝市の人らに交りつつ留守居する吾が子をしばし忘るる
抱え来しパパイヤにはレモンをかけてまだ明けきらぬ朝の食事す
六十日たてば芽を吹くと水を注ぐアマゾンシダの毛深き根っこ
アマゾンの樹々の動きの見えぬまま樹海の上を夕焼に翔ぶ
アマゾンの樹海は続き緑濃し巨き太陽の没ちゆく所
十幾年思い続けて今私の物カリブの島のモラという布
緑少し残り散りくるポプラの葉馬上の私の肩をかすめて
露光る合歓の木下を好みつつ走らす白馬に慣れ慣れて
音たててポプラの落葉踏んでゆくわが乗る白馬は汗にぬれつつ
牛の仔の生まるる季節を野にいでて雨雲厚きを気にしてをりぬ

陶土を棒もて叩き気泡を抜くこの方法もわがものとする

南米の赤土の色に流れゆくラプラタ河にしばし浮びぬ

アルゼンチンに育ちゆく吾子に笹舟を作りて土曜の午後の過ぎゆく

丸々の6Bの鉛筆手に慣れて十分毎のポーズを追いぬ

思いいる裸婦の線一つ描けずしてタンゴ聞こゆる今日の二時間

たし算にも掛け算にもスペイン語のある故に新しき言葉この頃覚えつ

鞭を持ちて教えしままに走る馬ギャロップとなるわが振る鞭に

プラタナスと並べる長き朝の影馬上の私の背筋を正す

はやばやとたそがれてゆく冬の日に父母を思う時間が多い

切々と心に重きこともなく早朝の靄に歩きていたり

今朝の霧ポプラの落葉に凍りつき見せたき人のふたりさんにん

鉛筆にて描きし私の足の形してチョコレート色の靴出来てくる

能の足黒人の足裸婦の足足を想い込みつつ過ぎゆく六月（ろくがつ）

私と全く同じき人はなし午后の石畳の道歩みゆく

パレルモの散歩より帰る幼子はユーカリの香を運びつつ来る

くさぐさの雑用を一人持ちおり歩み安けし落葉敷く道

一つこと思い込み来て十余年今日手にしたりインカのボロ布

犬らしき小動物の並びて並ぶインカの布の清し手仕事

山に登る男の持ち来しミイラの布に私の人生の始まりたりき

地図ならば線もて別るる国と国と言ひ争いぬ受話器通して

何もかも消え去りゆけりひたすらに白き馬を走らす

真向いの朝の光の眩しさをかまわずにゆく白馬と私と

去年より思いいること止めどなし足跡深く新雪をゆく

新雪に兎の足跡続きをり立ち止る私にアンデスの風

今日よりも寂しさ深き日は無しと過ぎし日のこと思い出づる日

雲海の中にわけ入り白々と雲の粒子の可愛かりけり

アンデスの麓に来たりて足元の雪が舞うのみにみとれてをりぬ

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇-〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三-四五-三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　090-8434-8646
TEL　03-6765-5838
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和六年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利